

# CHI2007 参加報告

お茶の水女子大学 辻田眸 慶応義塾大学 渡邊恵太

25 回目の節目となる CHI2007 が、2007 年 4 月 28 日から 5 月 3 日にかけて、シリコンバレーの中心地として有名な、カリフォルニア州サンノゼの San Jose Convention Center で開催された。参加者数は公表されていないが、会場には 2000 人ほどが集まっていた。

CHI (ACM Conference on Human Factors in Computing Systems) は ACM の中でも最大級の国際会議のひとつであり、またヒューマンインタフェース分野における最高峰の国際会議である。

今回会議が開催されたサンノゼは素晴らしい気候、澄み渡る真っ青な空、非常にゆったりとした都市空間という印象であった。

発表形式は、多数の平行セッションからなる論文発表を中心に、ポスター発表、デモ発表など多岐にわたっている。論文については、840 本 (Paper571 本、Note269 本) の投稿の中から、3000 以上の Blind Review を経て、182 本 (Paper142 本、Note40 本) が採択された。Paper の採択率は 24%、Note の採択率は 14% であった。

その中からさらに 28 本の論文が Best Paper Nominated となり、最終的に 6 本の Best Paper Award が選ばれた。

今年の CHI Academy には、株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所 (東京大学大学院情報学環 教授) の暦本純一氏が選出された。

以下で口頭発表の一部を簡単に紹介する。

V. Kalnikait 氏らによる、”Software or Wetware? Discovering When and Why People Use Digital Prosthetic Memory”は記憶を呼び起こすためには補助装置 PM

(prosthetic memory) を使用する場合と自らの記憶 OM (organic memory) とでは、どちらが有効的なのかを考察している研究である。どちらが有効的かは個人の OM に対する自己評価と PM の性能によるとされている。本論文は Best Paper Award に選ばれている。

A. Sellen 氏らによる ”Do Life – Logging Technologies Support Memory for the Past? An Experimental Study Using SenseCam”は「SenseCam は人間の記憶を本当にサポートできるのか」ということを考察するため、19 人の男女 (18-22 歳) に 13 日間の実験を行った。結論としては、過去について ”知ること” は効果があるが、長いスパンで考えればこれらのイメージが本当に価値のあるものかどうかは長期間の検証が必要であるということであった。本論文は Best Paper Nominated に選ばれている。

V. LeClerc 氏らによる ”Senspectra: A Computationally Augmented Physical Modeling Toolkit for Sensing and Visualization of Structural Strain”は構造ひずみを可視化するツールキットで、ひずみ具合を LED モジュールの色を変えることで表現している。

W. Gaver 氏らによる ”Enhancing Ubiquitous Computing with User Interpretation: Field Testing the Home Health Horoscope”は家庭内の様々な場所にセンサーを設置し、人の行動状況などから、それに応じた適当なメッセージをプリンターで印刷し、それをユーザがみることで、どのような影響があるのかを実験した

研究である。

S. Zhao 氏らによる”earPod: Eyes-free Menu Selection using Touch Input and Reactive Audio Feedback”は、ipod のホイールのような円状タッチパネルにおいて、聴覚のみを用いたメニュー選択を実現するシステムである。ホイールを回す速度に応じて、メニューの再生速度を変更するなど、高速な選択ができる工夫を行っている。通常の GUI によるメニュー選択と比較したところ、earPod システムは当初は低速だが、30 分ほど利用することで GUI より高速になるとされている。

Intaractivity は、短時間の口頭発表と、レセプションが行われる Exhibition スペースでデモ発表を行う形式である。P.Baudischi 氏らによる”Soap: How to Make a Mouse Work in Mid-Air”や Kimiko Ryokai 氏らによる”I/O Brush: Beyond Static Collages”まで、過去の学会で発表されたシステムもあった。どれも完成度が高いデモで、あった。

Work in Progress では、約 100 件のポスター発表が 2 日間に分かれて行われた。

今年は午前中のコーヒブレークの時間に発表が行われ、日本人の発表も多かった。ここでは、筆者らが発表した 2 件の発表を紹介する。

”SyncDecor: Appliances for Sharing Mutual Awareness between Lovers Separated by Distance”は遠隔地に設置された日用品の動きを連動させることで相手の行動や雰囲気さをさりげなく伝えるものである。ごみ箱の蓋の開閉やランプの明るさを同期させることで、バーチャルに同居しているような感覚を与えるものである。実際の遠距離恋愛カップル間で実証実験を行っている点が特徴的である。

“WillCam: a digital camera visualizing

users interest”は、ユーザの置かれた状況や関心を視覚化するデジタルカメラである。多数のセンサや 2 つのカメラを備えており、温度・騒音などの環境情報や、撮影者の表情などを取得し、リアルタイムにタグ付けするとともに、アイコン化して写真そのものに埋め込める点が特徴的である。さらに、撮影画像内の任意のモノや環境情報を矢印などでポインティングする機能を備えることで、ユーザの意図の可視化を試みている。会場では WillCam の実機を用いたデモを行った。デモを行っている発表は他にほとんどなかったこともあり、なかなか好評を博していたようである。

1 日目の夜には立食形式のレセプションが行われた。デモ発表やスポンサー企業の展示が行われていた。

また多くのスポンサー企業や大学が独自のレセプションを開催していた。中でも 2 日目の行われた Google のレセプションは San Jose Tech Museum を全館貸し切り、ワインや食事とともに、様々な展示物を楽しむことができ、非常に盛大なものであった。

最終日には 25 周年を記念して、Anniversary Party も開催された。25 周年記念のロゴがデコレーションされた大きなケーキやアイスクリーム、飲み物が用意され、変装用グッズも振る舞われた。

来年度の CHI2008 は 2008 年 4 月 5 日から 10 日にかけて、イタリアのフィレンツェで行われる。Ben Shneiderman 氏がダビンチに扮して、宣伝していたのが非常に印象的であった。詳細は <http://www.chi2008.org/> で案内されている。なお、CHI2007 の情報は、<http://www.chi2007.org/> に掲載されている。